

カニから見た鎮守府

メルクリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

轟沈した武蔵。その意識が戻ったとき、隴のカニとして生まれ変わった。

※文字がつぶれて見づらかったのでタイトル変更しました

旧：ムサシの隴蟹

目次

蟹（カニ）

吾輩は蟹である、茹でるとうまい。

したがって鎮守府内を単独で動き回るとは危険だ。私を食おうと狙う者が多すぎる。

そして今、私は臙から落ちてしまい鎮守府の廊下に取り残されていた。それもこれも朝寝坊をして慌てて演習に向かった臙のせいだ。

「これ、臙の蟹じゃない？」

（足柄か、早速面倒なやつに見つかったな）

「そうですね……って姉さん、食べちゃダメですよ」

「羽黒は堅いんだからあ。黙ってりや分らないって。今晚のつまみに姉妹で食べましょ。始めて見た時から狙ってたんだよね」

私以外にも艦娘と一緒に生まれてくる生物のようなものはいる。

漣のウサギもそうだし、島風や天津風の連装砲もそうだ。

しかし、そんな生まれ方したとわかってて食いたいと思うやつは頭がおかしい。

「姉さん、何でできてるかわからない蟹です。おなか壊すからやめてください」

（そうだ、馬鹿な真似はやめろ！）

「羽黒、知ってる？ カニカマは蟹が入ってないのよ」

「そ、そうなんですか？ それは知りませんでしたけど」

「スケトウダラの白身を磨り潰したものが普通ね。でも、蟹と書かれていれば別に疑問もなく、蟹だと思って食べていたでしょう？」

「……何を言いたいのか分かりましたけど、それは違うと思います」

羽黒は気の弱そうに見えて自分の考えははっきり言う性格をしている。

（私の部下だったときから変わらないな）

「私はね、蟹が食べたくて食べたくて食べたくて食べたくて、しょうがないのよおとおお」

戦闘は免れない。

（それならばっ）

私は高く飛び跳ねる。普通の蟹ではありえない跳躍だ。ハサミを広げ、狙うは――

「いたっ」

「ねえさんっ。首から血が」

私はその隙に一目散に走り去る。蟹の横走りは相手の様子を見ることができず、逃げるのには少し便利だ。

その後、身を隠しながら鎮守府を進む。蟹のサイズでは鎮守府は巨大な神殿のようで、曲がり角一つ曲がるのにも相当な苦勞を強いられる。

早く臙と合流しなくてはならない。……なのに今日に限ってすれ違うのは重巡以上の食い意地の張ったやつらばかり。せめて駆逐艦ならば臙に届けてくれる可能性があるのに。

「カニさーん。どこですかー」

消火器の裏に身を潜めていると呼ぶ声がする。

私は廊下の窓のところまで登ると手を振って知らせる。

「こんなところにいたんですか。乗ってください」

臙が艀装の上に私を乗せる。

(助かった)

生きた心地がしなかったとはこのことだ。

「いなくなったりしたらダメですよ。先輩達に見られたら食べられちゃいます。今日は炊飯器が壊れたとかでおなかを空かせた艀娘が多いみたいだし」

(……ぞつとする話だ)

「はあ、でもカニさんに乗せると安心します。やっぱり一緒に生まれながらでしょうか」

まるで大事な相棒のように私を大切にしてくれる臙。

その一言と安心する笑みで、寝坊したことも、私を振り落としてしまったことも許せてしまう。

しかし、私の意識はカニに非ず。

大和型二番艦武蔵、それが私の本当の名前だ。

私の意識は戦艦棲鬼との相打ちで一度途切れる。

あの戦いに後悔はない。私の持てる力を全てつぎこんだのだ。本能の赴くままに、永遠と思えるような一瞬が最高の戦いをつくり上げた。

そして、目が覚めると私は朧の蟹になっていた。

私が轟沈してから三日後、初めて建造された朧とともに生まれ変わったのだ。

理由は定かではない。

今のところ有望な推測は私の艦装を資源化し、朧の建造に使ったからなのかもしれない。しかし、何せこの身体である。自分で調べることにすままならないのだ。

「今日の演習もボロボロにされちゃったなあ。妹達の着任は早かったからうらやましいな」

朧着任から一週間。まだ実戦経験はない。漣、潮、曙はすでにレベル50を越えている。朧はまだ10。第七駆逐隊を再結成したものの、朧は足手まといの日々が続いていた。

姉妹達が朧に良くしてくれるからこそ、朧の気持ちは焦りを見せる。

「もともと私は艦船だったときから一人でいることが多かったんだよね。第七駆逐隊だって活動期間はそんなにないし。妹達は南で戦ってたけど、私は北の冷たい海で沈んだし」

支給された12.7cm連装砲を丹念に磨く。深海棲艦と正面から戦うにはあまりに心もとない武器。

特に武蔵からすればまるでおもちゃのような主砲だ。

「そーいや沈没したのは私が最初だったのに、艦娘着任は最後になったのか。うまくいかないもんだなあ」

(自分が不幸であるかのようにつぶやくな！)

私は朧の肩の乗るとそのほっぺたをつねった。

「いたたたた。どうしたのカニさん。弱音を言ったから怒ってる？」
私はつねるのを止めた。

「わかってるんだ。でも、戦いになったらきつとみんなに迷惑かけちゃう。演習なら危なくないけど、実戦になったらと思うと……」

隴は根が真面目だ。

こんなことを話しながらも、主砲と魚雷の整備の手を止めない。隴は自分にできることはすべてやっている。それは一番近くで見ている私が保証する。

隴の悩みは外的要因。隴自身にはない。必要なのは的確なアドバイスをくれる者だろう。

(つまり、これは提督が気にかけてやるべきことだ!!)

私は隴が寝静まると執務室へと向かう。さすがに夜なので艦娘は出歩いていない。

私は怒りに満ちていた。隴と一緒にあって一週間、提督の顔を一度も見ていないのだ。新顔にこまめに声をかけてやらないのは組織の長として問題がありすぎる。

(執務室だ)

扉を開けるのはさすがに蟹では無理だ。

そこで扉を何度か叩く、すると様子を見に提督が顔をのぞかせる。

「誰かいるのか？」

その隙に部屋に入り込んだ。

「気のせい、かな」

提督は私に気付くことなく、自分の椅子に座る。それから手で顔を抑えた。

「……少し、期待してしまった」

意味不明なことをつぶやく。

まあ、今はそんなこと関係ない。こいつがやるべきは隴をちゃんとフォローすることだ。

正直、勢いでここまで来てしまったので案はない。

(とりあえず机に乗つかってみるか)

机の上まで跳躍するが、提督は全く気付かない。

というか仕事をしている様子もない。提督はそんなに暇な仕事じゃないだろう。

全くもって腹立たしい。

「……すまん、武蔵」

提督から涙が流れる。

それを見た瞬間怒りの気持ちさが霧散してしまった。

「俺が馬鹿だった」

さめざめと泣く提督にわれに戻ると、執務室の隅に目が行った。

私の主砲がそこに置いてあったのだ。46cm三連装砲はあの戦いで半壊していたはずだ。しかし、きちんと修理されてある。

「何で俺はあそこで進撃を選んだんだっ」

(提督は、私のために泣いていたのか……、隴へのフォローにも手がつかないのもそのせいかな)

そうか、私が原因だったのか。

提督とは部下で遊び仲間だった。よく悪乗りが過ぎて大和や加賀と一緒に怒られた。秘書艦の経験もなかったため、あまり真剣な表情を見た記憶もない。

もちろんこういう風に泣く男だなんて、知らなかった。

「ん？ 蟹？」

机の上の私に提督が気付く。

「何で蟹が、……そういえば新しく来た隴と一緒に蟹が出てきたって、お前はその蟹か？」

私はうなずいた。それが伝わるかどうかはわからなかったが、もともただの蟹ではない。人語を解すくらいはできるかも、と思われてもおかしくはないだろう。

「漣のウサギみたいなものか」

あっさり理解してくれる。

私のために涙を流してくれるのは嬉しけれども、私が願うのは次の涙を流さない努力だ。今、提督がやるべきことは後悔ではない。苦し

46cm三連装砲に触れた瞬間、理解できた。この装備は『使える』と。

ために持ち上げてみる。綿菓子を持ち上げると変わらない、何の抵抗もなく浮いた。

艦娘の装備は力で持つものではない。常人の持てる重量ではないが、よしんば持てたとしても、どうやっても主砲を発射することはできない。

装備の扱いは物理的なものに起因するのではなく、精神的なものに起因すると言われている。実際艦娘はその重量を気にすることなく、軽々と持ち上げる。

装備は魂で持つもの、以前姉の大和がそう教えてくれた。

(ならば武蔵の魂を持つ私ができるのもおかしくはない)

見れば、提督の顔が青白くなっていた。

「え、なんで。なんで、蟹がそれを持てるの???'」

私は狙いをつける。

「う、動いてる!?!」

(発射—————!)

爆音と共に執務室の窓に大穴を空けた。

部屋の家財道具やら書類やらがその大穴に吸い込まれて消えていく。

それを見た提督は全身の力が抜け、へたへたと座り込んだ。

「は? なんで? 蟹?」

——こうして、46cm三連装砲を装備した蟹を装備する駆逐艦「朧」は深海棲艦との戦いの最前線へ向かうことになる。